７月号　令和２年６月30日発行

荏田小だより

横浜市都筑区荏田南町６９４番地[TEL911－0149]
[http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/eda/]

支える人に喜びを与える子ども

校長　伊藤　智樹

学校が再開して１か月が過ぎようとしています。第一期の分散登校、第二期の時差登校による給食なしの午前中授業と制限はありますが徐々に教育活動が行われるようになりました。保護者の皆様にはこの１か月間ご理解とご協力いただきましてありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。

明日７月１日からは、給食が再開し午後の授業も始まります。１年生にとっては小学校初めての給食、２年生以上は４か月ぶりの給食となります。衛生面、運搬時の安全面を考慮に入れて給食を実施していきたいと思います。

朝マスク越しではありますが私が「おはようございます」と声をかけると「校長先生おはようございます。」と声で返してくれたり、頭を下げて挨拶を返してくれたりする子もいます。日常的な当たり前の風景ですが、この当たり前のことが今の私にはとても嬉しく感じます。

変わらぬこと、学校でなければできないこと、学校だからこそできることがたくさんあります。子どもたちの成長には、人や自然とのかかわりがとても大切になってきます。

マスクが品薄で購入のため各地で「マスク行列」が見られました。そのときの埼玉県内のドラッグストアでの出来事がマスコミに報道されたことがありました。

> 一人で待っていると、散歩中とみられる４０～５０代の男性から「イベントでもあるのですか」と声を掛けられた。事情を説明すると、男性は「それは大変ですね」と言って立ち去ったが約４０分後に戻って来て、「少ないですけど使ってください」とビニール袋を手渡して立ち去った。中には未使用のマスク６枚が入っていた。「マスク欲しさにけんかする人もいるご時世に、寒い中をわざわざ戻ってきて自身のものを無償で他人に手渡すなんて」と感動した女性は、「市内にこんな素晴らしい人がいることは誇りです。できれば『あの時の温かい気持ちに救われました。心から感謝しております』と伝えたい」と話している。
>
> 【2020 年 3 月 4 日埼玉新聞】

この記事を見て東日本大震災の炊き出しの現場を取材していたベトナム人記者の言葉をもとにした新聞コラム欄のことを思い出しました。

> ３・11 からまもなく、１人のベトナム人記者が取材で被災地に入った。避難所で少年にインタビューする。少年は津波で両親を亡くし、激しい寒さと飢えで震えていた。一つのおにぎりを家族で分けて食べるような状況だった。記者は見かねて少年に自分のジャンパーを着せかける。その時、ポケットから１本のバナナがぽろっとこぼれ落ちた。記者が、「バナナ、欲しいか」と問うと、うなずくので、手渡した。ところが、少年はそれを食べるのでなく、避難所の片隅に設けられたみんなで共有の食料置き場に持って行き、もとの場所に戻ってきたという。～以下省略　【2012 年 1 月 28 日毎日新聞】

『人間』という字は、「人」の間で生きてこそ人間という字になります。相手を気遣い、周りの人と共に幸せに生きる力、そして他者への思いやり、いたわり、優しさ、感謝の気持ちは、日々の行動の中で育まれてきます。その根底にあるものは**他者への想像力**であると思います。この他者への想像力は子どもだけでなく、私たち教職員も同様です。

感染症予防のための活動の見直しや休業期間で学習の遅れも生じていますが、そのような状況下でも私たち教職員は、「他者への想像力」を常に磨きながら教育活動を行っていきたいと思います。